



Title	英語進行形の意味論
Author(s)	長谷川, 存古
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1973, 6, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47748">https://hdl.handle.net/11094/47748</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 英語進行形の意味論

長谷川 存古

## 0. 序

英語の進行形はその歴史的起源についても意味についても、文法学者のあいだでもっとも意見の分れてきた問題の一つである。いまこの形式の歴史的起源と発展という通時的问题是ひとまずおき、意味にかんしてもそれは時間あるいは動作の相の表現形式として Tense あるいは Aspect の範疇に属するとされるのがふつうであったが、とはいえ学者の間ではその厳密な意味はもとより名称自体も千差万別であった。また我が国の細江逸記氏は、このように進行形を時間の表現形式としての Tense あるいは Aspect とする一切の説に異議を唱え、Tense の意味は時間とは無関係なりとする氏の論の一環として、進行形をも一切の時間乃至時間意識と無関係であるとする説によって通説に挑んだ<sup>(1)</sup>。

筆者はこれらの論を通観しつつ、(それを逐一紹介批評することは限られた紙数の中では不可能であるが,)進行形の意味について自分なりの一応の見解にたどりついた。とはいえこれが言語的直観に欠ける外国人としての根本的弱点をその出発点において持っているのではないかということをおそれざるをえない。

## 1. 進行形の用法と意義素

「進行形の意味」について論を進めるにさいして、筆者はまず、「それがいかなる発話の中で発されたものであろうと、一つの形態が常にもつ共通の意味」という意味での「意義素」の存在を仮定しておきたいと思う。本

論で「進行形の意味」とよぶのはこれである。もとよりこのような考え方はたとえば進行形についても早くは Sweet の時代からあったのであるが、これを「進行形の意味・用法」に対して「意義素」として明確に規定したのものとしては国広哲弥「日英両語テンスについての一考察」<sup>(2)</sup>がある。もとより本稿は服部四郎、国広哲弥両氏によって体系的に展開されている<sup>(3)</sup>「意義素論」の全体系を全面的に踏襲し、その上で論を進めようとするものではない。ただ言語研究の最新の段階において、この意義素に相当する考え方がもはや否定されているかに見えるが、筆者はこの問題の究明は次の研究段階にゆずり、当面の進行形の検討はなおこの意義素の存在を仮定し、その究明を最終目標とするという段階でこの論のまとめをおこなったのである。

すなわち、進行形の用法としてはたとえば

(1) He *is reading* the paper at this moment. [F. R. Palmer]<sup>(4)</sup>  
のように「現在における動作の進行を表わす」とされるばあいもあれば、また

(2) I *was continuously falling* ill. [Ibid.]

のように過去においてしつこくくりかえされた状態を、かなりの感情を伴ってのべる場合もあるのであるが、これらの多様な用法の中で、すべての進行形が共通に表現するものはなにかを探ろうとするのが本論の試みである。以下で「進行形の意味」と呼ぶのは、このような意味で「意義素」と呼ばれるものである。

## 2. 進行形の用法の分類

上述のようなみでの進行形の意味を明らかにするためには、まず種々の進行形の用法を、なんらかのかたちで整理することからはじめなければならない。そのさい、種々多様な進行形の用法を、まず第一に単一の基準によってすべて分類し、さらに感情表現等の付加的な意味が伴うばあいにも、

それは単一の基準による分類に上乘せする形で分類することによって、はじめて英語の進行形の全用法の総合的な把握が可能ではないかと考えられる。

ではこの場合、これらの全用法を把握分類しうる単一の基準とは何であるかといえば、それは時間であろう。とはいえそれは進行形をとる動詞の指示する動作・状態と発話の時点との客観的な時間関係ではなく、話者の意識に表象された時間でなければならない。しかしながら、進行形の場合問題となるのは過去、現在、未来という Tense によって表現される時間意識ではなく、進行形の発話にあたって話者によって表象される時点の数あるいは時間のハバであると考えられる。これを基準として進行形の種々の用法を観察すると、次のような分類組織が得られる。

A：単一の時点のみが表象されている。<sup>(5)</sup>

B：くり返しおこる多数の時点が表象されている。

B<sub>1</sub>：一定の条件のもとで規則的に反復する多数の時点

B<sub>2</sub>：不規則に分布する多数の時点

B<sub>3</sub>：一定の時間ワクの中での無数の点が表象されている。<sup>(6)(7)</sup>

以上のように分類された進行形の用法は、それぞれ形態によって規定された現在・過去・未来の三つの Tense をとりうる。この場合未来進行形は {<sup>Will</sup>/<sub>Shall</sub>} + be + ing と定義する。

以上の各分類項目に属する用法を例示すれば次のようになる。

◎A—現在

(2) *I'm making my voice as pleasant as I can.*

—Maugham: *Our Betters*

◎A—過去

これには進行形をとる動作が表象される時点がワクとして明示されている場合と明示されていない場合とがある。ワクが明示されているのは、(3) のような場合である。

(3) *When I saw him, he was running away* [F. R. Palmer]

これにたいして(4)の場合はどうであろうか。

(4) *They were eating batter pudding and jam, when the boy jumped off his chair and stood perfectly still.*

— Lawrence: *Sons and Lovers*

このばあい“when……”の clause はワクを設定する機能をもっていない。しかしこのばあいの基準点が形態によって明示的に示されていないとはいえ、それが、when-clause によって示される食べる動作の中断の時点と結果的にさしてへだたっていないこともまた事実である。(4)において implicit な基準点は、子供が食べるのをやめて立ち上る直前にあると見られる。“*They were eating batter pudding and jam,*”は中断される直前の時点での菓子をしばし黙々と食べている状況を描写しており、comma がわずかの時間の推移を表現したのち、“*when the boy jumped off……*”が次の時点での食べる動作の中断と子供のあわただしい動作を叙述する。

また、時点がまったく表現されていない過去進行形も少なくない。次のような場合である。

(5) ……*How cold and slimy the water had been. A fellow had once seen a big rat jump into the scum. Mother was sitting at the fire with Dante waiting for Brigid to bring in the tea. She had her feet on the fender and her jewelly slippers were so hot and they had such a lovely warm smell!……*

— Joyce: *A Portrait of the Artist as a Young Man*

これは主人公の意識の流れを描写した行文であって、“*Mother was sitting at the fire……*”は場面の突如の変更を示す最初の文であり、その時点はなんら context に示されているはずもない。

◎A—未来

(6) *Tomorrow we shall be seeing him off to France.* [Onions]<sup>(8)</sup>

◎B<sub>1</sub>

(7) He's *always reading at meals.* [F. R. Palmer]

(8) The poor dear *is trying to propose to me every time he sees me* and I'm *doing all I can to prevent him.*

—Maugham: *op. cit.*

(9) I *was seeing him every day.* [F. R. Palmer]

◎B<sub>2</sub>

(10) She's *always breaking things.* [*Ibid.*]

(11) I *was continually falling ill.* [*Ibid.*]

◎B<sub>3</sub>

(12) And *all the time she was thinking* how to make the most of what she had, for the children's sakes.

—Lawrence: *op. cit.*

(12)は一見(10), (11)と同様の時間意識, すなわち不規則にくり返す多数の時点を表象しつつ発話されているかのようなのであるが, しかし, (10), (11)と(12)のあいだには明確な時間意識の差があると考えらるべきであろう。(10), (11)の 'always', 'continually' 等の副詞は, いうまでもなく literal な意味ではなく, いずれもこれらの動作・状態が不規則的にはあるが執拗にくりかえされることを, 反撥・嫌悪等の感情をこめて表現している。それに対して(12)の 'all the time' は, もちろん彼女のここで述べられているような思考の中断はあるにせよ (この進行形はこの思考が conscious effort によってなされていることを示している) その中断は(10)はもとより(11)ともまったく性質の異なるものであって, この場合の 'all the time' は (10), (11) の 'always', 'continually' とはまったく対照的に literal な意味と解してよい。すなわち, (12)で表象されている時間は, B<sub>2</sub> の場合のような不規則にくりかえされる時点ではなく, 一定期間にわたって間断なく連続する時間である。とはいえこの場合に表象される時間と, 単純過去形が使用される場

合に表象される時間との間にはなんらかの差違があるともみられる。しかしこの問題はいずれにせよA群に分類された進行形の基礎的な用法の検討ののちに、はじめて考察されるべきものであろう。

### 3. 進行形の意味

前章での進行形の各用法の、単一の基準による分類にもとづいて、第1章「進行形の用法と意義素」でのべられたような意味での進行形の意味の考察に進むわけであるが、この場合その意味決定の最も有力な根拠となるのは、進行形と単純形との対比である。そしてまず前章での分類によるA群に属する進行形の基礎的な用法を検討することによって進行形の意味を一応設定し、それがB群に属する用法にたいしても有効であるか否かを検討するという順序をふみたい。

したがってまず単一の時点のみを表象するA群に属する進行形を、それに対応する単純形と対比することが必要になる。

3.1. 一般に完結動詞の単純現在形は現在（拡大された現在）の習慣を叙述する用法がもっとも多いのではあるが、しかし、A群の現在進行形と同様に、現在という一時点を表象して発話される場合もちろん存在する。このような用法はつぎのようなばあいに見られる。

(i) (13) Here he *comes*. [Onions]

(ii) (i)をさらに典型化したものとして、アナウンサーによる実況放送がある。

(14) ..... and he *passes* the ball to Smith, and Smith *scores!*  
[F. R. Palmer]

(iii) みずから実演しつつその自分の動作を観客に確認させるための発話

(15) I *place* the rabbit in the box and *close* the lid. [*Ibid.*]

(iv) 動作の叙述ではなく、その発話自体が行為をなすもの

(16) I *name* this ship the Queen Elizabeth. [J. L. Austin]<sup>(9)</sup>

(V) 動作の様態に興味の焦点がある場合、現在進行中の動作も単純形となる。

(17) He walked all the morning. Look at the way he *walks* now. [F. R. Palmer]

いまわれわれは進行形の意味を明らかにすることを目的として、現在進行形と対応する単純現在形、すなわち現在進行中の動作が進行形でなく単純形によって叙述される (Performative Utterance の場合は特例であるが) ばあいを検討しているのであって、したがって非完結動詞の単純現在形は当面は問題とはなっていない。

なお単純現在形には上述のような用法のほかに

(18) John *enters* through the window. [F. R. Palmer]

のような「ト書き」と

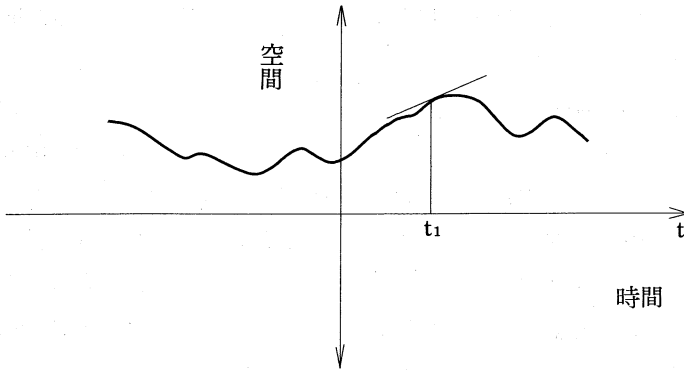
(19) Principal Talks [毛利可信]<sup>(10)</sup>

のような見出しがある。このうちとくに(18)はその動作に対する関係の点でさきにあげた単純現在形の用法のなかの(i)~(iv)と関連性があると考えられるが、しかし、ト書きと見出しは現在として表象された時間における動作・状態とは関係なく、timeless なものをただもつとも neutral な Tense としての単純現在形の形をかりて述べているにすぎないものであるから、現在進行形との対比という観点からの単純現在形の用法からは除いたのである。

ところで現在進行形によって示される現在進行中の動作を、当の現在進行形および単純現在形はそれぞれどのようにとらえているのであろうか。これはとりもなおさず本論の目標とする問題であるが、まずとりあえずタテ軸を空間、ヨコ軸を時間とした2次元の座標面を設け、そこに完結動詞の示す一個の運動をグラフで示すとグラフ1のようになる。

ここで(13), (14), (15), (17)に例示されたような用法においてこれらの単純形は





グラフ1

この動作  $f(t)$  をいかにとらえて叙述しているのだろうか。

一つの見方は、進行形がこれらの動作を一つの時点からとらえているのにたいして、(14), (15) のような単純形の用法の場合は動作の進行と平行して発話がおこなわれるから、グラフ1で左から右へ移動する  $t_1$  にしたがって、 $f(t)$  そのものがあるままに記述され、したがって進行形をとらないというものであろう。

しかし、ここで注目すべきは、(16) の発言行為における単純現在形である。この動詞 'name' は、命名という行為を記述するのではなく、この発話自体が命名行為そのものであるという関係にある。したがってこの場合はグラフ1のような、一定の時間のハバをもった動作  $f(t)$  は存在しない。ここで問題となるのは、(13), (14), (15) の場合にも、叙述と発言行為との差があるにもかかわらず、動作のとらえ方は発言行為の場合と同じではないかということである。そしてこのような意味での動作のとらえ方の問題は、通常現在形についていわれる Aspect の対立とも異っているようである。<sup>(11)</sup>

ここで、過去時制に目を転じて、ここに進行形と単純形との対比の問題を解決する手がかりを探ろう。

3.2. 前節でわれわれが問題にした、一定時間にわたって様々な局面を示しつつ進行完結する動作を、単純形動詞はいかにとらえて叙述しているのかという問題は、過去形の場合 Aspect の問題として早くから論ぜられてきた。すなわち Aorist と Imperfect の二種の過去の区別であり、Kruisinga はこれをそれぞれ Narrative, Descriptive と呼んだ。<sup>(12)</sup> わが国では細江逸記氏が「直断性の“Past”」と「低回性の“Past”」としてこの二種の過去の対比を主張している。氏によれば「直断性の“Past”」は「その表示する事件を簡明率直に陳述し、一気にこれを片付けて仕舞ふ」のに対し、「低回性の“Past”」は、「或事柄を述べると共に、それをよく噛みしめて味はふ様な気持を伴うものである。」<sup>(13)</sup>

ここで氏のあげておられる二種の Past の例をそれぞれ一例ずつ再引用する。

Perfect (直断性の“Past”)

(20) The Russians, badly led and dishonestly provisioned, *were beaten* on land and sea. The Russian Baltic Fleet *sailed* round Africa to be utterly destroyed in the Straits of Tsushima. A revolutionary movement among the common people of Russia, infuriated by this remote and reasonless slaughter, *obliged* the Tsar to end the War (1905); he *returned* the southern half of Saghalien, which had been seized by Russia in 1875, *evacuated* Manchuria, *resigned* Korea to Japan. The White Man was beginning to drop his load in eastern Asia.

Wells, *The Outline of History*

Imperfect (「低回性の“Past”」)

(21) There *was* a sound of revelry by night,  
And Belgium's capital had gather'd then  
Her Beauty and her chivalry, and bright  
The lamps *shone* o'er fair women and brave men;

A thousand hearts *beat* happily; and when  
 Music arose with its voluptuous swell,  
 Soft eyes *look'd* love to eyes which spake again,  
 And all *went* merry as a marriage bell.

—Byron, *Childe Harold*

ここでは動詞の完結・非完結の別がなされず、「低回性の“Past”」には  
 両種の動詞がともに入れられているが、われわれにここで関心のあるのは  
 完結動詞による「低回性の“Past”」である。

この二種の Past をグラフ1との関係で見ると次のようにいえるのでは  
 ないか。

時間の推移にしたがってさまざまな局面を示す一つの動作  $f(t)$  を、その  
 あるがままにじっくり観察して記述するものこそ Imperfect に属する  
 Past である。それにたいして「直断性の“Past”」の方は、このようにさ  
 まざまな様態がある場合にはごく短時間であるとはいえ一定の時間の推移  
 のうちに示す一つの動作を、もはや時間的ハバと空間的ひろがりを含象し  
 た単一の「点」のごとくに指示するものであって、このような把握のしか  
 たを前者と同一のグラフ1を使って表わすことはできない。「直断性の  
 “Past”」にあっては一つの動作は二次元座標面上で一つの点として把握さ  
 れているのである。

3.3. ではグラフ1で図示された運動をそのままに記述する「低回性の  
 “Past”」と、進行形（この場合は過去進行形）との関係はどのようなも  
 のであろうか。この問題を明らかにすることによって、本論の目的である  
 「進行形の意味」を明らかにすることができると考えられる。この問題を  
 検討するにあたって、次の一対の対照的な文が、恰好の用例を提供してく  
 れるようである。

(22) She sat down next to a girl very much her own age who *was reading* Anna Lombard in a cheap, paper-covered edition.

—Mansfield: *The Tiredness of Rosabell*

(23) She glanced at the book which the girl *read* so earnestly, mouthing the words in a way that Rosabel detested, licking her first finger and thumb each time that she turned page.

—*Ibid.*

この二文は同一短篇中の同一場面を描いており、わずかに間をおいて相次いで現われる。

ここで共に現在進行中の「読む」動作を叙述しながら、一方は進行形、他方は単純形となっているのは、そこにどんな相違があるのだろうか。

この(23)は、“so earnestly……”以下の詳細な Manner Adverbials が付随していることをみても、細江氏が、「低回性の“Past”」と呼んだものの典型であろう。この場合、これをグラフ1にてらせば、この単純過去形“read”は、生き生きと揺れ動く‘reading’の動作  $f(t)$  を、基準点  $t_1$  を中心としてありのままに描写したものであることができる。

それにたいして(22)の進行形は何を表現しているであろうか。ここでまず注目すべきは進行形の形式  $be + \text{—ing}$  そのものである。

進行形は、動作の進行を示すものでありながら、その形態は明らかに英語の特徴である静態表現なのである。<sup>(14)</sup>ではこの進行形における静態表現は何を表現しているのであろうか。ここで注目すべきは(23)の単純過去形が豊富な Manner Adverbials を伴っているのとは対照的に、(22)の進行形が Manner Adverbial と共起していないことである。

これは一見 paradoxical であるが、ここに進行形の本質をうかがうことができるのではないか。すなわち進行形が静態表現であるという場合そこに示された静態は決して動作そのものの持続の静態的な表現ではなく、あ

る一時点においてその動作を静態化することによって、逆にその動作の生々躍動する dynamism を表現するのである。(22)の場合にも、(23)とは異りヒロインが腰をおろした時点でのとなりの少女の運動それ自体が叙述されているのであって、その運動の様態を述べる機能は進行形にはないのである。

このように見てくれば、もはや結論は明らかであろう。dynamic な運動を、ある一時点における静態として表現し、それによって逆にその運動の dynamism 自体に表現を与えるというのが進行形のはたらしきであるとするならば、このようにして表現されたものはグラフ1の運動  $f(t)$  にとって何なのか。それは時点  $t_1$  における  $f(t)$  の微係数  $f'(t_1)$  であろう。

一般に進行形が動作の進行や継続を表わすといわれるのは、厳密に解釈すれば上述のようなことではないだろうか。実際、be 動詞による静態表現によって、動作の進行が表現されるというのは、このようなメカニズムなくしては考えられないのではないか。

このように見てくれば、

(24) He *lives* somewhere near Kobe.

(25) He *is now living* with his relations.

[毛利可信]<sup>(15)</sup>

の二文を対照したとき、(24)が単に住所を示す文であるのにたいして、(25)が暮しぶり全体を叙述する文であり、しかもそのような生活が一時的なものであることを示していることもおのずと明らかになる。(24)における非完結動詞 'live' は、それ自体がすでに静態を表現している、すなわちグラフでいえば直線を表現しているから、それを微分する必要がない。すなわち進行形とならない。それにたいし(25)の定結動詞 'live' は、進行形となっていること、すなわち微分されてはじめて静態化することによって、逆にその 'live' によって叙述される動作自体は、生々流動する「生活そのもの」であることを表現し、また、そのような dynamic な運動としての生き方であるから、やがては終熄停止に向うことをも示しているのである。

3.4. 前節では、まず過去形に目を向け、単純過去形をまず「直断性過去」と「低回性過去」に分類し、低回性過去と過去進行形とを対比することによって、過去進行形をグラフ1における微係数  $f'(t_1)$  の記述と認めたのであるが、次に(13)–(17)に例示した単純現在形についてはどうであろうか。

この場合にも、グラフ1の  $f(t)$  自体を記述したとみられる、いわば「低回性現在」とも呼ばれるべきものと、もはや指示する動作をグラフ1の座標面上の一点としてしか把握しない「直断性現在」とも呼びうるものがあると考えられる。そして、(13)–(17)に示された用法についてみれば、(17)のみが、「低回性現在」にあたり、他はすべて「直断性」ということができる。(17)について注意すべきは、

(26) He *talks* like an expert. [F. R. Palmer]

のような例は、(17)に類似してはいるけれどももはや彼の属性を示す文であって、時間意識においても(17)とは異っていることである。

これにたいして、眼前に「彼」の歩くのを見ながら発された(17)は、時間意識において

(1) He *is reading* the paper at this moment.

と同一であり、したがって、(1)を(17)と対比することによって「進行形の意味」の究明が可能である。そして、この場合にも過去形の場合とまったく同様の結論が導かれるであろう。

#### 4. 進行形の意味 (つづき)

前章ではA群に属する進行形の用法について、それが何を記述しているかを考察したのであるが、つぎに、この進行形の基礎的な用法の検討から得た結論を、同時に多数の時点を表象して発話されたと考えられたB群の用法へも敷衍しうるか否かを考えてみる。

(27) I'm *always breaking* the crockery. [F. R. Palmer]

これは本論での分類によればB<sub>2</sub>群に属する用法であって、ここで示され

ている時間のハバは習慣を示す単純形とさして異ならないと考えられる。F. R. Palmer<sup>(6)</sup>は彼の進行形についての‘limited duration’という規定から、(27)のような用法をはずしている。

国広哲弥氏はこれにたいし、氏の進行形の意義素〈limited duration〉を設定するにあたって、(27)をも、このような行為がつづく期間が限られているのだと解釈しようとする<sup>(17)</sup>たしかにそれは単純形による習慣の叙述にくらべれば限られているであろうが、しかし、“always”が挿入されていること、また native speaker によってそれが一般の limited duration を示す進行形のワク外に位置づけられていることを考えれば、氏の解釈は、進行形の用法の多様さを総体的かつ統一的に把握したものとはいえないのではないか。

必要なことは、(27)のような用法で示されている時間のハバは習慣を表わす単純形の場合の「拡大された現在」と本質的に異なるにもかかわらず、それが単純形とことなった特異な意味（多くの場合不快感等）を表現しうるのはなぜかを明らかにすることである。

この問題はすでに、第3章でおこなった分類で結論の前半を示したのであるが、

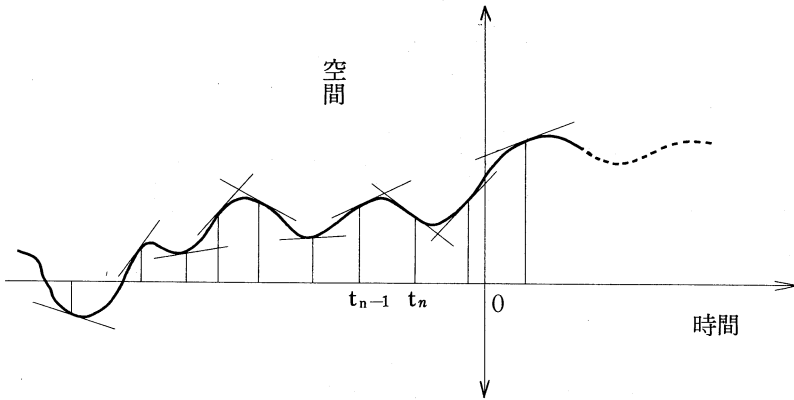
(28) I always take sugar in tea. [F. R. Palmer]

で表象されているのが「拡大された現在」それ自体であるのにたいして、(27)ではそのような行為をおこなう各時点が意識されていると考えられるべきではないか。Sweetの次の文もまさにそのことを示している<sup>(18)</sup>。

When a definite tense is used in a context implying repetition, the definite tense does not share in this meaning (for repetition is expressed by indefinite tenses,) but keeps its own; thus *his temper only failed him when he was being nursed* means ‘on each occasion when he was being nursed’ — that is, the definite tense applies to each of the repeated phenomena singly.

このように見れば、前章で得たA群の用法の進行形の意味についての結論、すなわちそれは微係数  $f'(t_1)$  を記述するとの結論は、そのままB群の用法にたいしても適用でき、しかもその単純形との相違を把握できると考えられる。すなわち、 $t_n$  を(27)で話者がせと物をこわす各時点のうち任意の一点とすれば、(27)で表現されているのはそれら  $f'(t_n)$  の集合である。

(グラフ2 参照)



グラフ2

このように、いくつかの時点において、時間の関数としての動作をその微係数によって静態的にとらえて叙述した進行形が単純形に比して多くの感情をもちこんだ表現となるのは当然であろう。ここで注目すべきは、(23)での「低回性の Past」'read' が多くの manner adverbials を伴って「彼女」の「読書」という行為の様態とそれに対する観察者の感情を明示的に示しているのにたいし、(27)のような進行形の場合は、感情は常に 'imply' されるのみであるということである。

低回性の単純形が  $f(t)$  それ自体を、その様態を Adverbial で示しつつ記述するのに対し、進行形は微係数を記述するのであるから、それには Manner Adverbial が伴うことは不可能であるかわりに、その進行形自体



に感情をこめることが可能となるのである。

最後に B<sub>3</sub> 群に属する(12)のばあいはどうであろうか。

(12) And *all the time* she was thinking how to make the most of what she had, for the children's sakes.

— Lawrence: *op. cit.*

このばあいは、「彼女」の‘conscious effort’を注いだ思考を、時間の関数  $y=F(t)$  とすれば、(12)の進行形によって記述されているのは、導関数  $F'(t)$  と考えられる。このとき、“all the time” によって指示された範囲の任意の  $t_1$  に対して、 $y=F(t)$  の接線

$$y-F(t_1)=F'(t_1)(t-t_1)$$

が得られ、このようにして、彼女の心血を注いだ‘thinking’が、単純形“she thought”より、はるかに vivid に表現されているメカニズムに迫りうる。

## 5. 結 論

これまでに見てきたように、進行形の使用によって記述されるものは A 群、B 群の用法を問わず、時間の関数としての動作の、話者によって表象された時点における微係数である。したがって単純形の動詞による動作の表現を進行形の表現にかえることは、その動作を微分することだと考えられる。これが第 2 章で定義した意味での「進行形の意味」に他ならない。

このようにして、進行形の意味は、これが指示する動作そのものの性質に帰せられるべきではなく、話者の意識におけるその動作のとらえ方であることが明らかとなった。

さいごに、進行形と Aspect, Mood, Tense との関係を概観しよう。動作の進行を表わすという意味での Durative Aspect と進行形との関係を見ると、これまでに見てきたように進行形は動作の進行そのものを叙述するための形式ではないから、進行形はこのような意味での Aspect に属する

範疇であるとはいえないであろう。

進行形と Mood との関係についてみると、細江氏の「集注叙述」の理論は、それがいかなる意味での「集注」であるかが、それ以上つっこんで明らかにされていないという点で問題であろう。それは氏がこの問題から時間概念を一切追放したことの結果であって、やはり、進行形は時間関係そのものを表現するものではないとしても、その「集注」が、依然として時間を媒介とした「集注」であることは否定できないのではないか。したがって細江氏のごとく進行形を時間と一切無関係という意味での Mood とするのはやはり飛躍があるのではないか。

また進行形は完了形とはことなり、時間関係そのものを表現するものではないから、これを意味のないみでも Tense とすることはできない。

このように見てくると、進行形はいかなる範疇に入るものかが改めて問題となるが、やはり時間関係を媒介としつつも動作にたいする主体的とらえ方を表現するという意味で広義の Mood に属すると見るのがもっとも妥当ではないだろうか。

なお完了進行形、「いいかえ」の進行形、完結動詞と非完結動詞の問題など残された問題は多いが、これらについてはなお今後を期したい。

#### 注

- (1) 細江逸記：「動詞時制の研究」(東京) 1932. pp. 94-121.
- (2) 国広哲弥：「構造的意味論」(東京) 1967. pp. 43-90.
- (3) 服部四郎：「言語学の方法」(東京) 1960.  
———：「英語基礎語彙の研究」(東京) 1968.  
国広哲弥： op. cit.  
———：「意味の諸相」(東京) 1970.
- (4) F. R. Palmer: *A Linguistic Study of the English Verb.* (London) 1965.
- (5) このばあい「時点」には場合によりかなりのはばがあることは、言語にとっては当然である。
- (6) B<sub>3</sub> の場合の時間の表象のしかたと、*He reads the paper every day.* のような習慣を表わす単純現在形において表象される「拡大された現在」とは、後述するように異なっていると考えられる。

- (7) このような本論での見方からするとき、A群における「時点」と毛利教授の「基準点」(毛利可信「意味論からみた英文法」(東京)1972. pp. 159-166.)とは明らかに一致するが、B群での「多数の時点」と「基準点」とをただちに同一のものとするのは速断にすぎるとは思われる。「基準点」はこれら多数の時点をさらに総括するような視点であるとも考えられる。
- (8) C. T. Onions: *An Advanced English Syntax*. (London) 1904.
- (9) J. L. Austin: *How to do Things with Words*. (Oxford) 1962.
- (10) 毛利可信: 「動詞の用法」下(東京)1960.
- (11) 本論は、英語では対応する形態をもたないAspectを、文法カテゴリーとして認めようとするものではない。
- (12) E. Kruisinga: *A Handbook of Present-Day English*. (Groningen) 1931. p. 31.
- (13) 細江逸記: *op. cit.* p. 81.
- (14) 毛利可信: 「意味論から見た英文法」(東京)1972. p. 43f.
- (15) *Ibid.*
- (16) F. R. Palmer: *op. cit.* p. 94.
- (17) 国広哲弥(1967) p. 86.
- (18) H. Sweet: *New English Grammar*. (London) 1898. §2222.

(大学院学生)